
愛しい日々

黴菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しい日々

【Nコード】

N5501A

【作者名】

黴菌

【あらすじ】

あなたに…聞こえてる??あなたと過ごした愛しい日々は今も大切な宝物。ずっと死ぬまで忘れない。だって…あなたを今も愛してるから。

ブログ

あなたと過ごしたほんの少しの愛しい日々。

今でも宝物だよ。

あなたは今も…笑っていますか？？

第1話：出会い

あれは10年前の事だ。

高校の授業をサボってここで寝ることが好きだった。

成績はそんなに悪くないから、いつも先生は目をつぶっている。

俺はもう少しで深い眠りに墜ちようとしていた。

「こんな所で何やってんのぉ?？」

俺は女子の声に目を覚ます。

そのまま目をあけると…見覚えのある顔が見下ろしていた。

確か… 相沢佳奈。

学校内で噂の美少女だ。

「パンツ見えてるよ。」

寝そべっていたので彼女のスカートの中が嫌でも目に入った。

「えっ！？ちよっ勝手に見ないでよ（汗）！エッチ！！（笑）」

そう言って彼女は焦ってスカートを抑えた。

まだ俺の視線からはピンクのレース模様が見えていたが、まんざらでもないと言わないでおいた。

「許可とったら見てもいいんだ??」

冗談半分で俺は言った。

君の焦った姿が妙にかわいかったから、
からかいたくなった。

「人にもよるねえー（笑）なんちゃってー（笑）」

笑うともっとかわいかった。

「んで？相沢はなんでここにいるんだ？？」

「あっそうそう！森永 聡くん！！君を探しにきたのだよ！！」

相沢が笑顔で言った。

「なっ…何？」

俺はなんだか少し恥ずかしくなった。

「アド教えて???ちょっと君には興味があるのさ（笑）」

そういつて相沢は自分のポケットから携帯を取り出した。

「ふむふむ。おっけえ 登録完了！今日メールするから（笑）バイバイ」

そういつて相沢はピンクの下着をちらつかせながら去っていった。

俺は最後まで寝そべっていた。

寝そべると景色がいい事に気付いた。

第2話：メール

その夜、部活から帰ると相沢からメールがきていた。

メールを開くのに妙に緊張して、見るのに十分程かった。

件名：初メール 登録よろしく

こんばんわんこお 部活終わったあ？？

なんて呼べばいいかな？私は佳奈でいいよ

文字の一つ一つが相沢の顔を思いださせた。

なんだかくすぐつたい。

自然と相沢の笑った顔が焼付けた目から脳へ送られてくる。

件名：今終わった。

俺の事は聡でいいよ。

俺は何故かギクシャクしてしまつて、一言だけのメールを送つてしまった。

送つた後：すぐに後悔した…。嫌われたかも…。

件名：堅いよ！！！（汗）

聡なんか堅い！！タメなんだからもつとほがらかにい

思つた以上に明るくカバーしてくれたのが嬉しかった。

そんな感じで俺達は眠たくなるまでずっとメールをしていた。

メールが返ってくるまでいつも俺は携帯を握つて待っていた。

そして着信音になると餌をおあずけされていた犬のように、

携帯に食いついた。

件名：眠い
ZZZ

明日バスケの朝練あるからそろそろ寝るね
また明日
バイバイ

俺も十分眠かったがメールが終わるのは……残念だった。

件名：オツケエ

俺も明日テニスの朝練があるから。んじやおやすみ〜。

なんだかおかしい気持ちになってそれをごまかすかのように、俺は深い眠りにつこうとした。

しかし…眠かったはずなのに…メールをやめた途端に、相沢が今何をしているのか気になってあまり寝付けなかった。

自分に芽生え始めた感情の足音が…心の底で聞こえていた。

第3話：朝の学校では

翌日いつもと違って早く目が覚めた。

すぐに支度をし、ラケットを持ってでていった。

学校に着いて、コートに行くと…なんと誰もいなかった。

そういえば…昨日コーチが朝練ないって…。

しまった…いつもあるもんだから勘違いしていた。

早く起きた事を後悔しながら、教室へ向った。

誰もいないと思っていたが、一人だけ…机に俯せになって眠っている人がいた。

相沢だった。

俺は起こさないように気をつけながら歩いた。

しかしそれも虚しく、俺は机の脚につまづいてけたたましい音をたててこけた。

「つてえ…。」

右足の膝は擦りむいて血が出ていた。

「えっ！？ 聡何やってんの！？ だっ大丈夫？？」

目を覚ました相沢はそういつて駆け寄ってきた。

「いついや何も問題ないから（汗）」

そついいながら俺は倒れた机を戻していた。

「あつ聡っ！ 血が出てるよ！！ 早く手当てしなきゃ化膿しちゃう！

「保健室いこ！」

冷静な判断だった。相沢は完全に焦っていた。

「大袈裟だって（笑）こんな舐めれば治るから。」

「ダメ！聡がよくても私はダメなの！！はいつ肩貸してあげるから！行くよ！」

相沢は自ら俺の腕を自分の首にまわした。

そして頼りない足どりで歩き始めた。

「今日朝練なかったんだねー。間違えちゃった（笑）聡もだけどねえ。」

「相沢もなかったんだ（笑）」

「私の事は佳奈でいいっていったじゃん！！！」

相沢は頬を少し膨らませていった。

それがかわいくて笑いそうになったがなんとか堪える事ができた。

「んじゃー…かな？」

「聞こえないよーもっと大きな声でえ（笑）」

そういつてからかった。

俺はその時、彼女への愛を自分から感じた。

「佳奈…好きだ。」

「えっ!？」

俺は自分にびっくりした。感情のままにその言葉を発してしまった。

「えっと今はその…」

言い訳をしようとした俺を佳奈の言葉が遮った。

「私も好き…だよ。付き合いおう?。」

「あっ…うん。」

俺は呆然として無意識に言葉を返した。

「良かったあ…。」

佳奈はそういつとそのまま俺に抱き付いてきた。

少しでも俺より短い身長が信じられない程愛らしかった。

第4話：運命の日

どこにでもいる普通の恋人同士だった。

そう…あの日まで。

あの運命の日がくるまで。

俺達が付き合いだして何日か経った頃、佳奈は珍しく学校にこなかった。

心配になってメールをしても返ってこなかった。

俺は部活を休んで佳奈の家へ行った。

この前一度遊びに行った事があったから道は知っている。

佳奈の家に着いて玄関前のインターホンを何度押しても、反応はなかった。

すると1台の車が俺の前でとまった。

佳奈のお父さんだった。

「君は佳奈の…のりなさい。」

俺は確かに胸騒ぎを感じた。

行き先もわからず俺は車に乗った。

車は病院に着いた。

何故か予想どおりだった。

佳奈のお父さんに着いていくと…一つの病室の前で佳奈のお母さんが静かに…泣いていた。

その姿は…俺の心拍数を更に上げさせる。

佳奈のお父さんは冷静を装っていたが今にも泣きそうだった。

人間のもろさが…そこにはあった。

「聡君…落ち着いて聞いてくれ…。」

佳奈のお父さんがいつになく真剣なまなざしで俺を捕らえた。そのまなざしから…俺はもう逃げる事ができない。

「えっ…。」

俺はその言葉が異常に恐ろしかった。

聞きたくない…でも…聞かなくてはいけない。

後悔したって…。

その言葉が俺を壊したって。

佳奈のために…。

「佳奈はね…後1ヶ月しか生きられない。」

世界が…逆さまになった…気がした…。

第5話：涙

短い命に涙がでそうだった。

1ヶ月：その単語一つが…佳奈の命。

「佳奈は昔から重い心臓病でね…昨日…状態が急変して……ドナーがいれば助かるんだが…見つからないんだ…。」

「なんでですか？？なんで佳奈を助ける人間がいらないんですか？」

わかりきっている…そんな理由は…。

「この世界には…佳奈のようにドナーがいなければ助からない人間がたくさんいるんだよ……。その数にドナーはついていけない。」

佳奈が心配になってきた。

痛さで泣いているかもしれない。

「佳奈には…知らせたんですか？？」

「ああ…さっきな。」

佳奈は自分の命の残りに泣いているかもしれない。

俺は一步踏み出して、重い病室のドアを開いた。

佳奈はいつものように笑っていた。

目が真っ赤なのに気付いた。

「聡い！会いたかったあ！！病院ってつまないんだもん。」

その元気なフリが…俺にとって苦しかった。

「1ヶ月だろ??」

俺は佳奈の命を言った。

「聡…蝉ってね1週間の命なんだよ。その間に人間に捕まっちゃうかもしれない。車にぶつかって死んじゃうかもしれない…。1日だけの寿命の虫だっている。人間はその何倍も生きれるのにね。私の残りは1ヶ月…聡…それは誰にだってくる時間なんだよ??だからね…泣かないで。」

俺は泣いてる事に気付いた。

「悪い…明日またくるな…。」

そう言って俺は佳奈に背を向けた。

佳奈を見ないように。

泣いている佳奈を見ないように。

第6話：悪化

俺はその次の日も部活を休んで佳奈の所へ行った。

「あつ聡。部活大丈夫なの??」

佳奈は前より割と元気だった。

「いいんだよ。佳奈が病院にいるんじゃメールだってできねえもん。」

「ゴメンね...。」

佳奈は重く謝った。

「いって。そうしたくてやってるんだから。」

本当はキツかった。試合が近いのでダブルスでくむ相手に迷惑を掛けていた。

「ならいいけど…無理しないでね。」

佳奈は前と一緒にで明るいが、たまにこんな風に暗くなる。

ごまかしきれない感情が佳奈にはあるんだ。

時間は無情にもどんどん進んでいく。

佳奈の命の残りを聞いてからもう一週間経ってしまった。

佳奈は自分の体が弱くなるだけ明るく振る舞った。

「佳奈…大丈夫か？」

「なんともないよ！これ位いつもの事だよ（笑）」

佳奈は最近よく咳こむ。

とても苦しそうに。

「ゴホッゴホッ…っ…」

佳奈の口からは…血がでてきていた。

それをおさえていた手も真っ赤だった。

「佳奈っっ！！大丈夫か！？今誰か呼ぶから！！！！」

俺は病室を走ってでた。

出た瞬間運良く佳奈の担当の医者と会った。

「あのすみません！！相沢さんが…。」

ドサッ…

佳奈の病室から何かが落ちる音が聞こえた。

俺は医者をおいて病室へ飛び込んだ。

佳奈が床に倒れていた。

「佳奈っっ！！」

佳奈に駆け寄ったが意識はなかった。

医者がきて…その後に看護婦が走ってきた。

そして佳奈は運ばれていった。

しばらくして…応急処置が終わった様で佳奈は病室に戻された。

まだ佳奈は眠っているようだった。

「佳奈…後…23日しかない…。俺何してゃればいいんだよ…。」

そう呟いた。

佳奈になげかけるような…独り言。

「こんな…自分が無力だなんて…しらなかった。」

「聡は…何もなくていいんだよ…？私の側にいてくれるだけでいいんだもん。それだけで…私は笑っていられる。」

佳奈はいつの間にか起きていた。

「でももう…時間がないよ…佳奈の残り…少ない…。」

「聡…私怖いよ…。咳が酷くなる度…時計の針の音が聞こえる度…すごい怖い…。私の死が近付いてくる…。聡がいるだけで…本当にいいから…。」

佳奈の言葉は俺を世界中の誰より特別にしてくれた。

「ありがとう…佳奈…。」

「私のセリフとらないですよ（笑）」

佳奈は涙を拭いながら笑ってそう言った。

第7話：欲しいモノ

それからまた一週間経った。時間が過ぎるのがとてつもなく早い気がした。

後…16日…。

ドナーはまだ…見つからない。

佳奈の様態はどんどん悪化していった。

ついには…酸素を運ぶ機械がなければ呼吸でなくなかった。

自分で歩く事もできなくなかった。

時間は確実に近付いてきている…。

「聡…私達……。」

「ん???どうした?」

「うっん…なんでもないや。」

最近の佳奈はいつもそうだ。

「佳奈今何が欲しい???それか…何して欲しい?」

「えっなんで?」

佳奈は自分の誕生日を忘れていたようだった。

いや…佳奈の誕生日は迎えられないから…今の内にやっておくだけ。

俺と佳奈と一緒に居れるこの時間に。

「いいからいいから。」

「そうだな…聡のお嫁さんかな？（笑）」

酸素を送る機械のマスクをつけたまま佳奈は目を細くして笑った。

「佳奈…。」

佳奈の気持ちは痛い程わかった。

「あっゴメンね！（笑）無理だよねそんなの…。」

「佳奈、結婚しよう。」

「聡…ありがとう。明日にでも結婚したい…。聡と一緒にバージンロード歩きたい。聡じゃなきゃ嫌だよ。」

佳奈の心のこもったその答えが幸福だった。

「聡いっつも急なんだから（笑）だから…好きだよ。」

俺は…目の前にいるか細く弱弱しい少女を守ってやりたいと思った。

第8話：言葉

あれからまた更に一週間が経ってしまった。

急げば急ぐ程、時間は待つてはくれない。

後9日…。

明日は俺と佳奈の結婚式がある。

俺はまだ結婚できる歳ではないから…正式にはないが…。

結婚式は教会でする。

二人で忍びこんで…

俺と佳奈の二人だけでする。

そう考えるだけでワクワクした。

「久しぶりだな…明日が早くきたらいいの…って思うの…」。

佳奈は弱弱しく病室のベッドの上ではほほ笑む。

佳奈は恐れていた。

明日がくる事を…。

自分の死が近付く事を…。

「明日の晩…11時に迎えにくるから。」

教会は病院のすぐ近くだ。

だから計画は立てやすかった。

「うん…。待ってる。」

そっいつて佳奈は何かを噛み締めるかのように目を閉じた。

「結婚…できるんだね?? 結ばれるんだね?」

佳奈は目を閉じたまま…俺に尋ねた。

「うん。そっだよ…。正式には…できないけど…。」

俺が結婚できる歳になった時は……二人は一緒ではないから……。

「正式とか……関係ないよ……。心が繋がれば……。一度でも繋がれば……。それで私は充分だから……。」

佳奈の言う意味がよくわからない。

「……佳奈???どういう意味……?」

「ううん……なんでもない……。」

そう言った佳奈の顔は……なんだか切なかった。

第9話：二人の至福

明日の夜はすぐにおとずれた。

俺は約束の時間に着くように、早めに家をでた。

病院に忍びこむ事は簡単だった。

それでも警戒しながら佳奈の病室へ向かう。

真っ暗な病院は少し不気味だった。

「や…とし？」

前を目を凝らして見ると、佳奈が手摺にたよって歩いていた。

俺は声が出そうになったのを必死で戻し、佳奈の元に走った。

「大丈夫か？なんで待ってなかったんだよ？？」

小声で佳奈に言った。

「ま…ちきれなく…て。早く行こう…。」

俺は肩に掛けていた鞆を首に吊し、佳奈を背中に乗せた。

佳奈の苦しそうな息切れが俺を急がせた。

病院を出て右に曲がり、少し進むと簡単に教会はあった。

この教会は今使われておらず、いつも空いている。

しかし、いつもここを掃除しにくる変わった人がいるらしく、教会は古びた所が見あたらなかった。

佳奈をズラリとならぶ椅子の一つに降ろし、鞆を床に置いた。

「佳奈…ドレスは手に入れなくて…。」

そういつて俺は鞆の中から真っ白なワンピースを取り出した。

「うっん…。綺麗…。聡…ありがとう。」

そう言って受け取ると佳奈は早速着替え始めた。

もちろん俺は後ろを向いていた。

ポケットに小さな箱を忍ばせて…。

「聡…いいよ。」

振り返ると…白い肌に真っ白なワンピースを来た佳奈が優しく微笑んでいた。

「佳奈…綺麗だよ。」

そういつと佳奈は恥ずかしそうに笑う。

「始め…よ？？」

そう言って佳奈は俺の腕に手をまわしてきた。

俺はそのままエスコートして、佳奈と一緒にバージンロードを歩いた。

そして聖母マリアの描かれたガラスの前で立ち止まる。

お互いに向き合い俺はポケットから小箱を取り出す。

「綺麗…。」

ダイヤモンドでもサファイアでもない。ただの銀色のリング。それは佳奈の一言でどんな物より美しい宝石へと変わる。

「聡…好きだよ…。」

そう言って佳奈は目を閉じた。

そんな佳奈の肩を両手で持ち、俺たちは初めてキスをした。

佳奈の震える唇を塞ぐように…。

長い長いキスだった。

唇を離すと佳奈は下を向き呼吸を整えた。

そしてもう一度…恋しそうにしていた唇が重なる。

今度は…佳奈の方から。

「聡…私幸せだよ…。」

佳奈がそう言ったような気がした。

時刻は既に12時をまわっていた。

佳奈の時間はまた少なくなっていく。

後一週間。

佳奈の命は時間に忠実だった。

第10話：乾かない足下

結婚してからもう5日たつ。

佳奈の時間はもう明日とあさって…。

佳奈はもう限界だった。

本当に起きる事もできない。

声も…耳を凝らさなければよく聞こえない。

その日は佳奈と1日中一緒に過ごした。

会話もせずずっと側にいた。

佳奈は一人で近付いてくる死をただ呆然と待っていた。

俺も話し掛ける勇氣などなかった。

佳奈の左手の薬指にある指輪が、太陽の日にあたり輝いていた。

「ち……と……し……。」

佳奈が小さな声で話しかける。

俺は急いで佳奈の口元に耳を寄せた。

「なんだ？佳奈？？」

「わ……たし……たち……であつ……て……よか……つた？？」

佳奈がいつも途中でとめていた言葉……。

「あたり前だ……。何言つてんだよ？？」

「だつ……て……わた……した……ち……であ……わなかつ……た……ら……さと
……し……そ……んな……かな……し……い……かお……しな……かつ……た。」

俺は何も言えなかった。

「う…めん…ね…ごめ…ん…ね…だから…」

佳奈は泣きながら苦しそうに言う…。

「わ…たし…のこと…と…わ…すれて…ね…」

佳奈はそう言った後…声にならない叫びをあげながら泣いた。

俺は佳奈に何も言えずに…病室からでていく事しかできなかった。

俺の俯く床は乾く事などない。

第11話：一か月後の世界

あの日からもう一か月も経つ。

今…あなたの墓石の前にいる……。

今も愛しいあなたの名前が無情にも刻まれている。

目を閉じると思い出す。

あなたの声…。

あなたの笑顔…。

屋上で眠るあなたの寝顔…。

あなたにもらった銀色の指輪…。

あなたがしてくれた誓いのキス…。

私はあの時…今までにない程の幸せを感じた。

聡…あなたがなくなって…もう一か月経つよ。

今も鮮明に思い出せる。

聡が死んだ日。

聡が死んだ瞬間…。

私は…何もできなかった。

聡を止める事ができなかった。

聡がいなくて…私はこの世界に存在している……。

今…私は息をしている…。

どうして???

あなたが居たから???

あなたが出会ってくれたから???

あなたに出会わなければ…私は違う人に恋をして…それで幸せを感じていたのかもしれない……。

あなたは…私意外の人を愛して…私が死んでいくのにも気付かず…
…幸せそうに笑って…結婚していたのかもしれない…。

それが…幸せだったのかもしれない…。

そしてあなたは今も…生きているはずで…。

私は一人で死んで行くはずで…。

聡が死んだ時……世界中の時計が止まったような……気がした。

第12話：心臓

私の命の期限はもう明日まで。

一か月は…私には実に早すぎた。そして…苦し過ぎた…。ほんの前
感じていた長さとは違って…。
まさに相対性理論だ…。

聡は……こない。

仕方のない事だ。

私が忘れてなどと言ったから。

何…期待してるんだろう……？

期待してみても無駄な事だ。

それは私が1番よくわかってるはずでしょ？？

でも…聡…

怖いよ…。

自分の…死ぬ日がわかってるのって怖いよ。

私の時計が…正確な事も…。聡がない事も…

暗闇が手をのばしてくることも…

「佳奈…。」

いつの間にか開いている
ドアの方を見てみると…。

夜の暗がりの中にふらつく聡がいた。

「なん…で…?」

聡はフラフラしながら私のベッドの脇に倒れ込むように座った。

「佳奈…。俺の…心臓を使ってくれ……。」

聡の…心臓??

「な……に……いつて……んの??」

聡の言う意味がわからなかった。

「俺はもうすぐ……死ぬから……。薬……飲んだんだ。ドラッグじゃない……毒薬……。もう医者には話をつけた……。」

月光に照らしだされた聡の顔は……。死ぬ前の苦しさと……。ある決心がまじっていた。

「……な……んで?なん……で??」

もう……。もう……。意味がわからない。

「俺が佳奈のドナーになる。」

聡の目は私を捕らえて放さず…弱弱しい音量で…力強い決意を…私に言った。

第13話：さよなら

「ダメ……だよ。」

「俺が決めた……。佳奈が死ぬ事は……。ない。佳奈は……。俺達が出会えて良かったのか……。って言ったよな??」

私は泣きながら聡の話を悔しそうに聞く。

「出会いなんて……。誰にもわからない……。でも……。きつ……。と俺は……。佳奈を守るために生まれて……。佳奈を守るために出会った。」

違う……。

「ち……。が……。つよ。」

「違うない…。だから俺は…。佳奈を守る…。それが俺の意思で…。俺の運命…。」

そんなの勝手だよ。

「わ…たした…ちの…であいに…うん…め…いなんか…い…らない。わ…たし…さと…しに…こく…は…くされて…せ…かい…じゆうの…だれより…し…あわ…せ…にな…れた。」

必死に聡を止めた。

たとえ手遅れでも…。

「ど…んな…お金…もち…よりも…な…んでも…持つて…ひと
より…も…。こつ…ふく…だつ…た。」

流れる涙は止まる事を知らずに…枕を濡らしていく。

「だ…から…し…あわせ…になり…すぎた…から…わ…たし…し
んでも…かまわ…ない。」

今なら心からそう思える。

聡のためなら…死ぬ事も怖くはない…。

「それ…なら…俺も…同じだ…。俺も…佳奈に…会って…両想い
になれて…幸せ…だつ…た。」

私は言い返せない。

悔しいけど……

聡の言う事に間違いはなかったから…。

「佳奈……愛してる……ずっと……だから……」

「さよなら。」

聡は……何も喋らなくなった。

目を閉じたまま…。

微笑んでる…。

私は泣きながら動かないはずの体を無理やり動かし…

ベットから落ちるようにして降りて…

動かない聡の側にいく。

「さ……とし？おきて……？？わ……たし……さ……としが……いなき
や……さ……としじゃ……なきや……。」

私は居眠りをする聡を見る事が大好きだった。

でも……今は……いつものように聡の寝顔を見て笑えない。

なんで……？？

聡……こんな気持ちよさそうに……眠ってるのに……。

私はどうして涙を流すの？？

最終話：愛しい日々

目が覚めると…そこはまたベットの上で…。

いつもの胸の痛みは消えていた。

「佳奈！！よかった…。手術成功したのよ！！佳奈生きてるのよ！」

お母さんが泣きながら抱き付いて来た。

私はただ呆然となすがままにされていた。

聴がない世界を…初めてみた。

いや…本当は聡は…私の体の中にいる。

私の血液を体中に送る役割を今も忠実に行っている。

それからもう10年も経つんだね…。

それから私は一か月で退院した。

そして聡に会いにいった。

冷たい石に埋まった聡に…。

聡…私達…本当に一緒になれたんだよ…。

私は心で聡に聞こえるように呟き…胸に手をあてる。

聡の…私の鼓動を肌から感じる。

でも…あなたの笑顔も寝顔も…見れないのは…残念…。

あなたと喋る事ができないのも…3度目のキスができないのも…みんなみんな…淋しい…。

この十年…そんな想いは消してしまおうと思ってた。

でも…あなたの命日が来るたび…私は泣く。あなたの墓石の前で…。

私が死ぬまでずっと一緒にいてくれる。

本当はこんな形を望んでいたんじゃないけど…。

あなたは…私の中に…一緒にいてくれる…。

もう…あんな哀しい別れをする事はない…。

聡は今も私の中で生き続け、私に明日を与えてくれる。

あなたは…今も私の中で鼓動をうち続けてくれる。

聡と過ごした時間……私の宝物…。

「聡…好きだよ…。」

今日をありがとう。

明日をありがとう。

出会ってくれて…ありがとう。

十年経った今でも……

この想いだけは変わらないから……

聡…

笑って…

あの愛しい日々のように……。

最終話：愛しい日々（後書き）

最後まで読んでいただき誠にありがとうございます。少しあやふやな所がございますが……持ち味だと思っただけければ嬉しいですよ。この話が気に入った方は評価していただければたいへん嬉しいです。本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5501a/>

愛しい日々

2010年11月13日02時48分発行